

地域づくりを模索した三年間



全国農業協同組合連合会
愛媛県本部
岡田 浩人

当センターに赴任してきたのは、(平成二十四年四月)でした。私は全農えひめからの出向という立場でしたが、センターの構成メンバーは、(愛媛県庁・県下各市町・四国電力・伊予銀行・愛媛銀行・愛媛県信連)と多彩に富んでおりました。今まで歩んできた職歴や考え方が違うメンバーがこのセンターに集まって、同じ方向に向かうのは難しくもあり又、奇想天外な発想に驚かされた三年間でした。

「舞たうんの編集に携わって」

そんな中着任後、最初に取組んだ仕事が『舞たうん』の編集作業でした。この『舞たうん』は、年四回発行しており、毎回担当者が異なり特集等の内容もその号の担当者が思案し原案を作成し、センター編集会議にて承認を得る段取りとなっております。私が担当したのは、一一四号でしたが、何を特集のテーマにして編集しようか悩みました。一一三号のテーマは、「自分たちの地域を大切に 高校生パワー全開」一一二号は、「地域活性化の新しい風 く地域おこし協力隊」といったように、それぞれ地域づくりに適した題材を掲げていました。そんな時、当時の所長さんから「岡田さんは全

農えひめから来られたのだからやはり農業の視点から特集テーマを考えてみたらどうですか？」との助言を頂き、考えた末、農業が地域に果たす役割は、食の供給ばかりでなく、田畑の景観がもたらす癒し効果・水源の涵養など環境保全も担っている。また、祭りの多くは農耕儀礼でもあり、「農業の衰退」によってこれを失う事は、遠く律令の昔から積み上げてきた日本文化の弱体化を招く。このよう



協働会議

に、「農業の衰退」は「地域(集落)の衰退」に密接にかかわっていると考えました。愛媛県において、一気には兼業化が進み、また、高齢化、担い手減少という要因も加わり、耕作放棄地が進行している

る集落が増えてきています。こうした状況を打破するために、土地基盤の整備と併せ、将来を展望した(担い手確保)営農形態の確立が不可欠であるとの認識から、集落農業を担って各地で「農業生産法人」が誕生しています。この号では、農業法人のなかでも取り分け集落(地域)農業を担って、集落(地域)住民、行政、JA等関係機関と協力して、後継者の育つ魅力ある農業を目指す「農業生産法人」をクローズアップし、今一度、地域と農業のあり方を考えてみたいと思います。特集のテーマを、「地域農業を担う集落営農く地域と共に生きる農業生産法人」と決定し、無事完成を致しました。

「地域づくりの難しき」

その他にも、この三年間色々な仕事を通じて貴重な経験をさせて頂きました。その一つに当センターが年一回発行しています「えひめイベントBOX」の編集です。愛媛県下各地で開催されるイベントを直接取材



なイベントであり、地域外の人と地域住民との交流の場であることを垣間見ました。また、集落実態調査や、協働による地域づくり事業で関わった集落、(過疎地と有限界集落と言われる所)に入ってヒアリングや協議をした事もありました。外部から人口減少率や高齢化率の数字だけ視て、何年後にはこの集落は消滅するなどというのは無責任な話で、でも、小学校や中学校が廃校となり、若者がいなくなつた集落の崩壊は止める事は出来ないのかもしれない。行政やボランティアも一生懸命のアシストをしているのは解りますが、現状では再生ではなく延命処置のように思います。地域のお年寄りの話を聞いても、本当はそのことを誰よりも解っているように思いま

し、写真を撮り原稿を書きました。今までは読者の立場で、美味しいものが食べられるとか、珍しいシヨウが見えるという視点でしか見ていませんでしたが、取材をして主催者の方から話しを聞き、そのイベントがその地域にとって活性化に繋がる大事

した。でも、自分の子供や孫たちには不自由な生活はさせたくないので。いずれ崩壊して消滅するかもしれないですが、その日まで出来る限りのアシストは必要ではないかと思つていきます。

「地域づくり研究会議に携わって」

そして、在籍期間中で、一番時間を割いたのが、「えひめ地域づくり研究会議」の事務局でした。この会は昭和六十二年に当センターの前身である(財)愛媛県まちづくり総合センターが中心となり県内の有志地域づくり活動者)四百人を募り、内子座で設立総会を開き「えひめ地域づくり研究会議」は発足されました。現在ではこの会も高齢化が進み百余名の会員となつておりますが、年六回程度の運営委員会の開催・年三回程度の地域フォーラムの開催・年一回の年次フォーラムの開催・年二回程度の機関紙「風おこし」の発行を行い、地域づくりに関する「情報交流の場・情報公開の場・学習と研究の場」として活動をしております。

一言で「地域づくり」「まちづくり」とかいいますが、どれを取ってもすぐに成果や答えが出るものではなく、行政等の補助金が下りる活動もありますが、ほとんどは(ボランティア)での活動なのが現状だと思えます。私自身少し前までは、そういう(ボランティア)は、暇と金があるものが自己満足と道楽であればいいと考えていました。実際に課題のある地域の方々の中でも、まだまだ「損得勘定」で、自分の家の事はやるが、人の家は知らんと言う方が多いのではない

でしょうか？

仏教の世界に(悟りを開く)という言葉が有ります。本来は過酷な修行を経て習得するものでしょうが、私なりに考えますと、(悟りを開く)すなわち自分が一番ではなく、人を思いやり、人に優しくできる事ではないかと思えます。

色々どめどの無い話をしましたが、「地域づくり」や「まちづくり」に必要なのは、リーダーシップやアイデアや財源はもちろん大切ですが、それに携わる人たちの「自分が一番でなく、人を思いやり、人に優しくできる」人生観がすべての原点ではないかと言ふ事を学びました。

最後になりますが、(公財)えひめ地域政策研究センターの益々のご発展と、職員の皆様のご多幸をお祈り致しております。三年間、学ばせて頂き有難うございました。



研究会議「年次フォーラム2014」